

紀 要

第 1 号

目 次

『紀要』の創刊にあたって

1. 琵琶湖湖底遺跡の調査の現状……………(濱 修)
 2. 近江の地域色の再検討
—弥生時代後期～古墳時代初頭における高坏形土器・器台形土器の実態—
……………(小竹森直子)
 3. 古式土師器研究ノート(1)……………(森 格也)
 4. 竪穴住居に付随するカマドの検討—滋賀県下の検出例から—……………(宮崎幹也)
 5. 衣川廃寺の再検討……………(細川修平)
 6. 穴太廃寺の建立と再建の年代をめぐって
—穴太廃寺のもつ問題点からのアプローチ—……………(仲川 靖)
 7. 中世土師器皿と生産地……………(横田洋三)
 8. 近江における瓦質土器について……………(奈良俊哉)
 9. 浮世絵にあらわれた煎茶茶碗……………(稲垣正宏)
 10. 魚獲りって難しい—抄網の機能と形態—……………(大沼芳幸)
-
-

1988. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

6. 穴太廃寺の建立と再建の年代をめぐって

——穴太廃寺のもつ問題点からのアプローチ——

仲 川 靖

1. はじめに

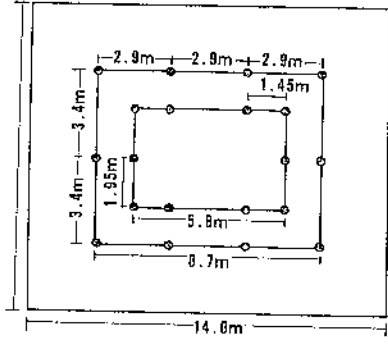
穴太廃寺については、古くから白鳳期の瓦の出土が知られ、昭和48年の保育園建設に伴う発掘調査で寺院の一画とみられる礎石の抜き取りとみられる遺構が検出される等¹⁾、その存在についてはすでに予想されていた。昭和59年4月から始められた滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会による国道161号線西大津バイパス建設予定地内の発掘調査で、予想をはるかにうまわる良好な遺存状態で、しかも寺院の中心になる堂塔が、すべて検出されるというものであった。さらに、誰もが予想していなかった二時期の寺院跡が遺存していた。二時期の寺院跡は、古い遺構が完全に削平されることなく、新しい遺構の時期に一部露呈している状態であった。このことは古い時期の寺院から新しい時期の寺院に移行する時間が極めて短期間であったことを示し、ある事情により再建されたことを暗示するものであった。そこで、古い寺院を創建寺院、新しい寺院を再建寺院と仮称した。二時期の寺院は伽藍の方位がまったく異なり、周辺の古地割より、創建寺院が大津北方の古地割の方位にのっとなって建立されたものが、大津宮遷都に合わせて、寺院を大津宮の方位に規制するため再建したものであるというのが、これまでの見解である。大津宮の実態が近年徐々に解明されつつあるが、依然全容が明らかになったわけではなく、謎の多いなか穴太廃寺に、大津宮遷都を解く何らかの鍵となるものが見出されると期待された。

このような期待が集められた穴太廃寺であるが、調査の過程で数々の新たな疑問点が生じ、新たな謎が増えるといった状況であった。本稿では、再建寺院を大津宮遷都期のものであるという仮定のもとに、伽藍配置と堂塔に関する問題点、瓦に関する問題点、周辺遺跡との問題点を一つ一つ確認した上で穴太廃寺の創建寺院と再建寺院の建立年代を推定してみたい。

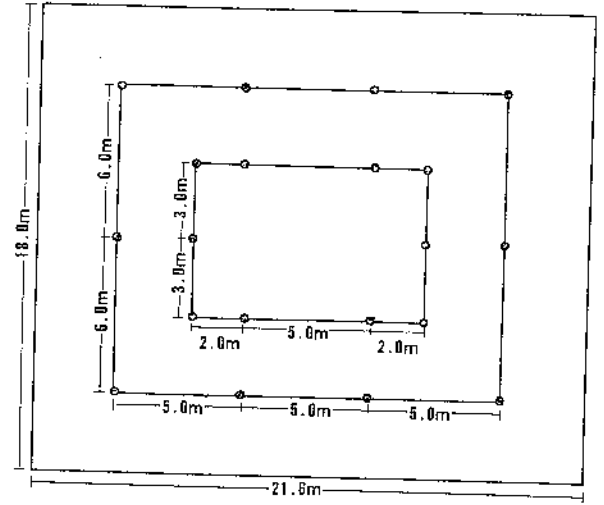
2. 伽藍配置と堂塔に関する問題点

創建寺院は、再建寺院建立の際、すべての建物を解体し、基壇も削平されたとみられるが、いくつかの基壇の一部が遺存していた。検出された遺構は、主軸を北東に32.5度振る方向で配置されており、東に塔、西に南北棟の金堂、これらを囲む形で回廊がめぐるとみられ、金堂の西にその一部が遺存していた。

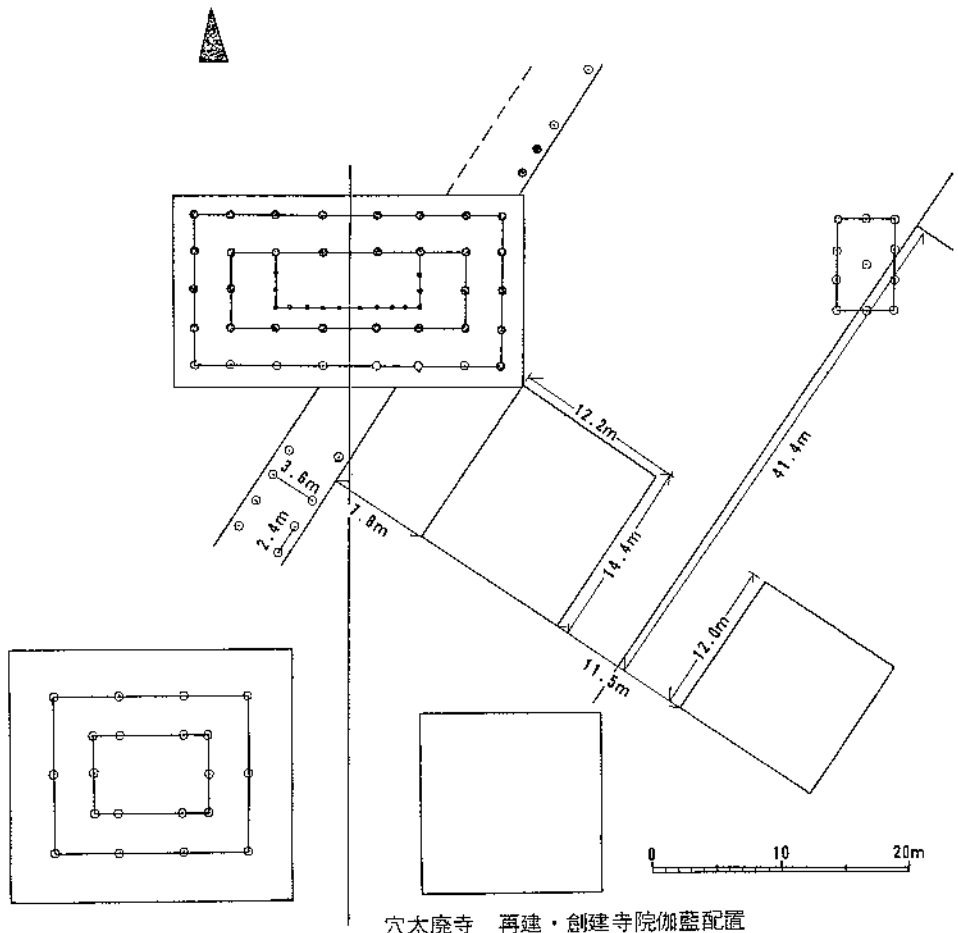
金堂は、基壇の大半が削平されているが、四周の地覆石はほとんど遺存していた。地覆石は、花崗岩の割石で幅80cm、高さ60cm、厚さ15cm前後のかなり大ぶりなものを地山を深く掘り下げて立てめぐらせていた。基壇の規模は、東西12.3m (34尺)、南北14.4m (40尺)で、南滋賀廃寺の



三重県名張市夏見廃寺金堂



奈良県桜井市山田寺金堂



穴太廃寺 再建・創建寺院伽藍配置

西金堂と同規模であるが、建物の方位が南滋賀廃寺のものが南面する建物であるのに対し、穴太廃寺のものは塔と対向する建物である。

塔は、金堂の東辺より約11.5m(32尺)の位置に西辺の地覆石が遺存し、これより東に版築の痕が確認された。地覆石は凝灰岩の切石で西辺と北西隅のコーナー一部のみが遺存していた。規模は不明であるが、南滋賀廃寺と同規模の12m前後のものと推定される。

回廊は、金堂の西辺の約13.2m西方に雨落葛石と礎石の抜き取り痕が、また、再建金堂の北東隅に、その延長の西側の雨落葛石と礎石が2基遺存していた。この両側の雨落葛石を延長すると回廊の幅は約5.4m(15尺)を測る。桁行の柱間は2.4m(6尺5寸)、梁間は3.6m(10尺)を測る単廊である。

主な建物は以上であるが、他に金堂の南辺より約41.4m(115尺)の位置に、主軸に直行して北側に面をそろえる東西の石列が遺存している。基壇の側石とみられるが、金堂のものに比して極めて簡略化されており、回廊の雨落葛石と同様のものを使用している。

創建寺院の伽藍配置の最大の問題点は、寺院建立が大津京以前の飛鳥時代にさかのぼるであろうということで、その配置が何式になるかである。従来飛鳥時代の地方寺院といえば、飛鳥寺式か四天王寺式といわれており、そのうち飛鳥寺式は現在、大和飛鳥寺一寺のみしか確認されていないため、概ね四天王寺式か、その系統を引く山田寺式の伽藍配置を考える向きがあった。穴太廃寺創建寺院に至っても、主軸を北東方向にとるか、西南方向にとるかで伽藍配置が大きく変わる。すなわち、金堂と塔が一直線上に建つ四天王寺式、山田寺式をとるか、あるいは、金堂と塔が並立する川原寺式をとるかの問題である¹²⁾。

まず、堂塔の規模、および地割りについてみると、金堂と西回廊の距離が極めて接近しており数値的にみても南滋賀廃寺と近いものである。山田寺の場合、金堂北辺から回廊南辺までが約14m(39尺)もあることや、金堂の規模を比べるとあまりにも小さいことが指摘される。さらに、塔を仮に12.3m四方と推定すると金堂の南辺と塔の南辺が一直線上に並ぶという点である。これは作図上の話であるが、南滋賀廃寺の場合も同様の事実が認められる。10m以下の基壇を測る塔であれば、山田寺式の伽藍配置も考えられないではないが、この事実によりまず山田寺式の伽藍配置は考えられない。

2点めは、北方にある雨落葛石状の石列である。様相は回廊の雨落葛石に思えるが、林博通氏は、これを講堂のものとする説をとっている。金堂の地覆石と比べるとあまりにそまつなものであるため、あえて中金堂のものとは考えなかったと思われるし、位置的にみても中金堂にとりつく回廊のものにはならない。かといって講堂のものという確証はない。飛鳥寺の場合、金堂は、上成、下成の二重基壇を成しており¹³⁾、下成基壇は玉石を一段並べただけの低いものである。また、南滋賀廃寺と比べると、西金堂の北辺の約34mの位置に中金堂の北辺が位置しており、穴太廃寺は約34.2mと極めて近い数値が出る。下成基壇の一部とみなすか、あるいは階段部の最後段とみなす考えもあり、中金堂の一部と考えられないこともない。さらに、これを中金堂の画とみなし、塔の東方に東金堂を想定して飛鳥寺式と考えられないこともない。何故なら、石列は、中軸線上にまでしか残っておらず、塔の正面に建物を想定することも可能であるからである。

以上の点を要約すると、講堂とみなした場合は太宰府観世音寺式、中金堂とみなした場合、川原寺式、塔の東方に東金堂を想定した場合飛鳥寺式となることが推定できる。数値的な面と基壇の現況をみる限りでは、南滋賀廃寺に極めて類似しているが、塔と金堂が対向する等の点からみると問題もある。北方の石列の北に建物が存在するか否かにより解決されると考えられるが、飛鳥時代の伽藍配置を考える意味で寺院史に新たな問題点を投げかけるものである。

再建寺院は、西に金堂、東に塔、その北に講堂とみられる建物を配する伽藍配置である。

金堂は、南面する建物で基壇南辺は、塔の南辺と一直線上に並ぶものである。両者とも瓦積基壇であるが、塔は、東端に地覆石が一部残る以外は版築層の基壇のみで削平が著しい。いずれも原位置をどどめる礎石はなく、金堂のみにわずかに根石を残すものや後世に耕作に邪魔になったため礎石のすぐ横に大きな穴を掘り、そこに落としこんだものなどが認められた。塔の心礎は予定地外であるため不明であるが、基壇中央部が円形状に別の土で版築されており、心柱の根巻きとみられ、心礎は基壇の地下に埋められていると考えられる。塔は一辺約14.4mを測り創建のものより大きい。金堂は、東西約22.1m、南北19.1mを測り、根石の残存状況より桁行三間、梁間二間で、三間×二間の身舎と同じく三間×二間の四面廂をつけた特異な柱位置をもつ建物である。同様の柱位置をとる建物は、奈良県山田寺金堂、三重県夏見廃寺金堂⁽⁴⁾にみられるのみである。穴太廃寺再建金堂は、山田寺金堂の規模に近く、柱間距離は同一である。上部構造については山田寺で復元が試みられており、身舎と廂の柱に放射線状に極木がかけられる扇形極木と推定されている⁽⁵⁾。極木は丸極木の一軒とみられ、穴太廃寺も円形の極先瓦が穴太瓦窯⁽⁶⁾で出土しており、丸極木と考えられる。軒の出は、山田寺が3.2mに対して穴太廃寺は3.5mとやや深いのが、これは方形瓦等の瓦のサイズによる違いではないかとみられる。

講堂は、わずかに南面の廂の礎石と雨落葛石が欠失する以外は、ほとんど当初の状態で遺存していた。基壇は、高さ30～40cm、東西28.2m、南北15.5mを測り、建物は七間×四間の四面廂をもつ構造で、身舎は五間×二間の規模をもつ。側柱の礎石間には壁の基礎になる地覆石の自然石を二列に並べている。身舎内には、二時期にわたる須弥壇の跡が残っており、当初、一間分の規模であったものを半間拡張して、中央三間分を約10cm程掘り下げて、約30cm四方の束石を配し、束石間に瓦の破片を敷きつめている。中央には、円形状に石を置き、本尊の裏込めの補強にしている。

主要伽藍以外の建物は、講堂の東、24mの位置に三間(7.1m)×二間(4.6m)の南北棟の礎石が検出された。礎石は北西隅に一石遺存するのみで、他は欠失しており根石のみが残る。位置関係からみて鐘楼もしくは経蔵とみられる。基壇等の痕跡はない。この小規模な礎石建物の東方約15mの位置に南北に長く延びる礎石建物がある。全容は不明であるが、東西一間、南北五間以上を検出した。礎石は二石遺存しており、他は欠失して根石のみが残っている。建物の規模からみて僧坊と考えられる。

再建寺院の伽藍配置および堂塔の概略は以上である。回廊は検出出来ず、再建金堂の西側が、かなりの落ち込みになっている点より当初からつくられなかったとみる説もある。また、講堂の須弥壇の占める割合が極めて大きい点を指摘して、講堂が本来もつ説法、講話の場所としての機

能が果たせないとして、これを南滋賀廃寺や川原寺の中金堂に該当するとし、講堂はさらにこの建物の北側に位置するのではないかとする説がある⁽⁷⁾。須弥壇の占地に関しては、和歌山県上野廃寺⁽⁸⁾においてもかなりのスペースをとっている例等があり、また、現在の京都教王護国寺（東寺）大講堂においても身舎の間半を占める例からみて問題はないと考える⁽⁹⁾。さらに、これを講堂でなく中金堂と考えると、前述の鐘楼かと思われる礎石建物の配置が極めて不自然である。二番目に、基壇の構造が、金堂等に比して極めて雑で、側縁に一段のみ自然石の雨落葛石を化粧石として配しただけで、基壇高も30～40cmと低い点である。以上の点からみて講堂とみなし伽藍配置は法起寺式と考えてさしつかえないとみる。

3. 瓦に関する問題点

穴太廃寺出土の瓦は、3型式に分類できる。

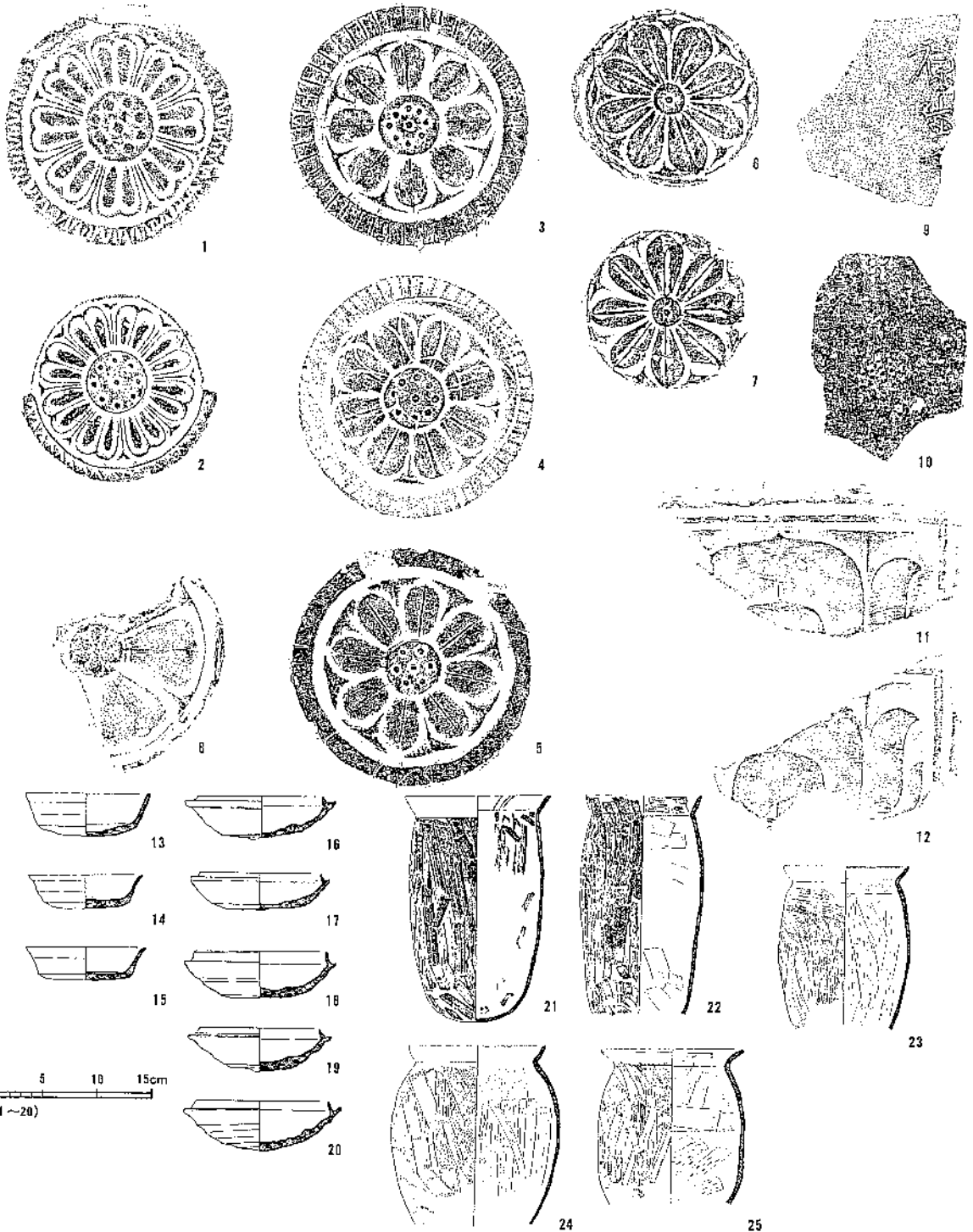
I型式は川原寺様式で複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、I-a型式とI-b型式の2種類に細分される。a型式は中房の蓮子が1+4+8でb型式は1+8の違いがある。いずれもつまみ出してとりつけたような小さなもので、南滋賀廃寺や檀木原瓦窯出土のような大ぶりの写実的なものとは異なる。また、a型式は子葉の界線があるのに対してb型式はない。I-b型式は穴太廃寺のみ出土しており、他の3寺院では出土していない。

II型式は百済系の単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、II-a、II-b、II-c型式の3種類に細分される。II-aとII-bは同じ文様であるが、II-a型式が肉厚のやや丸味を帯びた弁に対して、II-b型式は弁がやや長く、平べったい。また周縁の輻線文がII-a型式は間隔が狭く密である。II-c型式は、中房の蓮子が1+6で弁はやや細長く、周縁は素文である。3種とも范は異なり、彫り直して作ったものではない。

III型式は高句麗系の単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、弁は中央に稜をもつ偏平なもので、中房は小さく蓮子は1つである。同文様のものに豊浦寺、北野廃寺、隼上り瓦窯⁽¹⁰⁾のものがみられるが、いずれとも范は異なり、穴太の方がやや小ぶりで弁に丸味をもつ。

I型式に伴う平瓦は、重弧文軒平瓦と断面が弓なりに反る通常の平瓦である。II型式はいわゆる方形平瓦で断面が凹状を呈する南滋賀廃寺・園城寺出土のものと同様のものである。ただ、方形軒平瓦のうち、裏面反面のいわゆる軒先にせり出す部分に、方形軒平瓦にある文様と同じパルメット様の文様が押されたものがあり、現在知見するところでは、穴太廃寺のみの出土瓦である。丸瓦は、I型式もII型式も丸瓦で、方形の断面を呈するものはない。III型式に伴う平瓦、丸瓦は、現時点では確認していない。

これら3型式の瓦は、各々併用することはできない。何故ならば、瓦当にとりつく筒部の径が異なるため、I型式とII型式を同じ屋根に用いることはできない。穴太廃寺では、これらの瓦がどのように使用されていたかという問題であるが、幸いに、再建金堂が火災により焼失倒壊しており、屋根がそのまま倒れ瓦が散在する状況で検出された。その結果再建金堂においては、複弁系のI型式の瓦と単弁系のII型式が同時期に葺かれていたことが明らかとなった。このうちII型式の軒丸瓦の完形品が基壇地覆石近くよりほぼ等間隔で瓦当部を下にして倒立した状態や横に寝



1. 2. (I型式) 3. 4. 5. (II型式) 6. 7. (III型式)

9. (庚寅年銘平瓦) 10. (壬辰年六月銘平瓦)

11. 12. (方形軒平瓦) 13. (再建金堂北出土)

14. 15. (再建講堂, 北東隅, 整地層内出土)

16. 17. (161号バイパスGB区 第1遺構面切妻大壁造住居床面出土)

18. 19. (" 第2遺構面礎石建物床面出土)

20. (" 第3遺構面溝内出土)

21. 22. (創建西金堂南創建整地層下)

23. (再建金堂西側土手すそ部)

24. 25. (創建東築地付近創建整地層下)

た状態で出土している。また、再建金堂と再建塔の間では方形平瓦が10枚程ずり落ちて並んだ状態で出土している。I 型式の瓦は、基壇より5 m程離れた倒壊した屋根瓦の散在地点に集中しており、再建金堂では、明らかに、型式の異なる2種の瓦が同時に葺かれていたことがわかった。しかし、同一の屋根に併用することは不可能であるため、例えば、上層と下層の屋根、あるいは鍛葺の場合、複弁系のI 型式を上部に単弁系のII 型式と方形平瓦を下部に、あるいは、屋根のうち蟻羽といった妻の上にある張出し部にII 型式の瓦を用いるといったような使いわけをしていたと考えられる。南滋賀廃寺の報告では、金堂の基壇下層で単弁系の瓦と方形平瓦が出土し、上層に複弁系の瓦が出土するとある⁽¹¹⁾。金堂周辺の全面発掘が成されていないため断言は出来ないが、両者が同時期にふかれていたと考えられる。また、榎木原瓦窯でも両者が同時期に焼かれたと報告されており⁽¹²⁾、単弁系II 型式が複弁系I 型式よりも古いとされる説に伴い、II 型式の瓦が大津京の建物に限定されて用いられたという事実⁽¹³⁾はないものとみられる。

再建塔に関しては、同じく火災により焼失倒壊しているが、周辺の瓦の出土量が塔全体にふかれていた瓦の全体量の一割にもみえない状態であるため、I 型式とII 型式の瓦が各層ごとに違えて葺かれていたか、あるいはどちらか一方に統一されていたか不明である。

再建講堂は、発掘調査の結果、周辺に瓦の散在が認められず、また焼失倒壊した痕跡も認められないことから、瓦が葺かれていたかどうか不明である。金堂、塔焼失後檜皮葺きに替えられたという説もあるが、断言できない。ただ、講堂の北側と創建塔の西側にII 型式のみが出土する瓦溜めがあり、比較的良質の瓦が多い点より、あるいは講堂にふかれていたものかも知れない。

次にIII 型式の瓦であるが、これは出土地点が限定されており、再建金堂の北側から再建金堂と再建塔の間を流出した土石流の中と創建西築地塀周辺の土石流の中のみ出土する。すなわち伽藍中心部の北側より流出したとみられる。この瓦を創建寺院に葺かれていたものとする説⁽¹⁴⁾があるが、その点は後述検討してみたい。

他に2点のみであるが単弁六葉蓮華文軒丸瓦で、中房内に蓮子ではなく六葉蓮華文が施されている瓦当が、再建講堂須弥壇の外周に並べられた瓦片の中に混入していた。

4. 周辺遺跡との問題点

創建寺院を水野氏は渡来系氏族である穴太村首の氏寺であるという説をたてている⁽¹⁵⁾。森郁夫氏も同様に創建寺院を氏寺とし再建寺院は氏寺から官寺に昇格したものという説をとっている⁽¹⁶⁾。これまでに寺院周辺では、161号線バイパス関連の穴太遺跡（G B-F C地区、弥生町地区）⁽¹⁷⁾、穴太南遺跡（寺田地区）⁽¹⁸⁾、穴太下大門遺跡⁽¹⁹⁾において、他の地域に例を見ない構造をもつ切妻大壁造住居や礎石建住居が検出されている。湖西線関係遺跡においてもV A区の18号囲溝、V D区の4号囲溝、2号囲溝が切妻大壁造住居に該当する。遺構は、いずれも一辺8～9 mを圍り、一見すると方形周溝墓の周溝と見間違えるものである⁽²⁰⁾。構造は、幅0.3～1.0 m、深さ0.5～1.0 mの溝を掘り、溝内に柱を建て、埋め戻し、つきかためたあと、柱を大壁で塗りこめるものである。両側にとりわけ太い柱が1本ずつ遺存しているものがあり棟持ち柱とみられ、屋根は切妻と考えられ、宮本長二郎氏により建物の復元が試みられている⁽²¹⁾。これらの住居は、構造が竪穴住

居や掘立柱建物と異なるため渡来人の住居とみなされている。これら切妻大壁造住居は大津宮造営にかかわる氏族の集落の一つとみられている。西大津バイパス関係の穴太遺跡G B～F C区では、4面の遺構が確認されており、集落の変遷が如実になった。すなわち最下層が縄文時代後期から晩期の集落で、第3遺構面が大型の掘立柱建物を中心に構成される掘立柱建物のみの集落、第2遺構面と第1遺構面が、切妻大壁造住居、礎石建物を中心とした渡来系氏族の集落である。第4遺構面と第3遺構面の間は1mの砂が堆積する無遺物層で、第3遺構面から第1遺構面までの各層の堆積は薄く時間経過の差はあまりなく連続するものである。出土遺物より年代を推定すると、第3遺構面が陶邑II-4段階～5段階併行、第2遺構面から第1遺構面が陶邑II-5～II-6段階併行にあたる。第2遺構面から第1遺構面までの建物は四期にわたり建て替えを行っている。中心になる遺物はII-5段階～II-6段階で、大津宮期のIII-1、2段階併行のものは極めて少ない。陶邑II-6段階が7世紀の第2四半期に編年されており、第1遺構面の第2期建て替えの切妻大壁造住居の床面よりII-5段階併行の杯が出土していることにより、最終段階の住居においても7世紀の第3四半期にまでかかるとは考えられない。また、湖西線関係遺跡のV-D区においても7世紀中頃の切妻大壁造住居を大津宮期の大溝が切っている。V-D区の住居の方位もG B-F C区の住居と一致しており穴太の古地割に規制されている。大津宮期以降の切妻大壁造住居がこの地域で知見し得ない事実は、大津宮遷都に伴い地割の変更が成され、居住区の整理が行なわれ、住み替えが成されたのではないかと考える。同様の現象が、これら氏族の墓域とみる穴太飼込古墳群、野添古墳群⁽²²⁾においてもみることができる。

5. 寺院の建立年代に関して

建立年代に関しては、再建寺院を大津京造営、遷都の667年と考えると創建寺院は必然的にこれより古い時期を考えねばならない。

文献等の資料には、全く記述されていないため、遺物、および周辺の関連遺跡より推察するしか手がかりはない。

再建寺院が大津京遷都に伴って再建されたとする根拠は、一つには伽藍の中軸線が大津京の地割と一致するという点と、方形平瓦を含むII型式の大津京関係寺院にのみ用いられていたとする瓦が出土するという2点のみで決定的な資料に欠ける。逆に創建寺院が大津京遷都期のもので再建寺院はそれ以後のものと考え、再建寺院が再建された根拠は果たして何に起因するのかという問題点がある。遷都後(672年)以後に大規模な寺院の造営を計画するとすれば、天武朝における国分寺、国分尼寺の造営ぐらいで、滋賀県では近江国分寺は瀬田桑畑に、近江国分尼寺は瀬田青江の地に比定されている。瓦以外の出土遺物としては、再建講堂須弥壇跡内の土器、寺域東側より出土した多量の土器があるが、いずれも8世紀以降のものである。再建金堂に関して、基壇南西隅で地覆石と瓦積の間の裏込めより鉢が出土しているが、これも750年代のもので、恐らく瓦積基壇の修復の際混入したものである。唯一、大津京時代に比定できる遺物としては、再建講堂北側で、講堂の下を通り北東に延びる創建西回廊の基壇上の再建寺院整地層中より出土した須恵器の杯がある。現時点で知見する遺物としては、極めて少ないというのが事実で、これ

は、錦織遺跡の大津京推定地でも同様であり、今後の問題である。

創建寺院の建立年代に関しては、III型式の高句麗系の素弁八蓮華文軒丸瓦をあて7世紀前半代とする説がある。III型式と同様の瓦当文様をもつものは、京都市の北野廃寺、宇治準上り瓦窯、奈良県豊浦寺出土の瓦があり概ね7世紀前半代をあてている。また、再建金堂北側の瓦積基壇に積まれていたと思われる平瓦の1点に、へら書きで「庚寅年」と刻まれた瓦があり、すなわち630年の庚寅年をあて、これが創建寺院にふかれた瓦であるとし、創建寺院を630年とする説である。「庚寅年」の判読については山尾幸久氏、故岸俊男氏の鑑定に基づくものであり、630年代の瓦とするのは藤沢一夫氏の鑑定に基づくものである。630年代以外には、570年、690年、750年該当するが、570年では、593年創建の難波四天王寺、596年創建の法興寺（飛鳥寺）よりも古く問題外である。690年は、藤原京遷都694年の4年前にあたり、672年の壬申の乱より18年後になる。750年は東大寺大仏開眼752年の2年前にあたる。藤沢氏の説によると格子のたたき跡がない。飛鳥時代の瓦はたたいた跡をきれいに消しとっているという点で飛鳥時代の瓦とし、III型式の瓦も630年のものとしている。あと一つに「壬辰年六月」のへら書の平瓦が出土している。壬辰年は632年、692年、752年該当する。整形方法は、格子のたたきを施したあとナデにより消しとっているが、たたきが一部残っている。庚寅年銘の瓦が灰色のよく焼かれた瓦であるのに対し、白黄色のやや焼成不良の瓦である。この瓦の出土により先の庚寅年が630年かという疑問が生じ、壬辰年が692か752年になるという問題に直面した。752年説となると、この整形手法を用いているI-a型式の軒丸瓦や重弧文軒平瓦がこれにあたり、新しいものになる。I-a型式の文様がやや写実性に欠けるものであるため年代の下るものとみる向きもある。重弧文軒平瓦においても、格子たたきをきれいにナデ消しているものがあることより庚寅年銘の瓦も750年の可能性がある。いずれにしてもこの2点の瓦で創建寺院の建立年代を決定することはやや疑問点が残る。今後、胎土分析等の化学的な調査の結果次第である。さらに瓦の項で述べたように、III型式の瓦の出土が土石流の中に限定されるという問題である。林博通氏は、創建寺院の伽藍周辺より出土しないため、III型式の瓦は創建寺院にふかれたものではなく、別の第3の寺院にふかれていた可能性があるとしている⁽²³⁾。仮に7世紀前半代にこの瓦をあてたとして、再建寺院が建立される662年までの約半世紀の間に2度も寺院が再建されたとするのは疑問がある。また、立地的にも、第3の寺院をもとめるには、創建・再建寺院の北側に伽藍を配するだけのスペースが見当たらない。さらに、II型式の瓦を創建寺院の瓦にふくとすると、穴太瓦窯で焼かれたII型式の瓦を7世紀第3四半期の大津宮時代と同時期に焼かれたとする説⁽²⁴⁾に矛盾が生じる。創建寺院を大津宮期に下げると前述の如く再建寺院の再建理由に問題が生じる。仮に創建寺院において、III型式—II型式の瓦が使用されたとするならば、第1の問題点としては、瓦の規格があまりに異なる点である。III型式の瓦当径が15cm程であるのに対して、II型式の瓦は、20cmもある大ぶりなものである。さらに、同様の瓦が出土する南滋賀廃寺の建立年代も大津宮時代より古い時期を考えねばならない。

瓦以外の遺物としては、創建金堂南基壇近くと、再建金堂西側の土塁状の高まりのすそ部、および、創建東築地塚近くで検出した3基の合せ口甕棺がある。いずれも創建寺院整地層下で、甕の上半は、整地の際削平されたと考えられ欠損した状態で出土した。特に創建金堂南の甕棺は、

位置的にも伽藍内のしかも堂塔のそばに墓を設けることはありえないため、寺院建立前のもと考えられる。甕は、近江特有の土師器長胴甕である。このうち、再建金堂西側の土塁状のすそ部と創建東築地堀付近出土の甕は、口縁端部に若干の相違があるものの器形はやや丸味を帯びた体部中央部に最大径を有する長胴甕で、胴部が長胴化する過渡期になるものである。器体の整形手法は、体部外面がやや目の荒いハケ目調整で、体部内面は、いずれも口縁部内面付近までヘラ削りのあとでいねいに革ナデ調整を施している。創建金堂南基壇近く出土の甕は、前述のものとは器形がやや異なり、口縁と胴部径がほぼ同じで、長胴化の進んだものである。整形手法は、体部外面を極めて細かい目のハケ目調整を密に行い、体部内面も、ヘラ削りはなく、外面と同原体を使ってのハケ目調整を全面に施すものと、革ナデを施すものである。同様の長胴甕が161号パイパス穴太遺跡のF C～G B区で出土しているため、切妻大壁造住居との関連と合わせて比較してみると、体部外面のハケ目調整の荒いものは、第2遺構面の溝跡より出土しているが、器形はかなり長胴化しており、寺院出土の前二者の甕とは器形がやや異なる。後者の甕は、第2遺構面から第1遺構面の甕に類似する。第1遺構面のものは、内面もていねいなハケ目調整が密に施されており、創建金堂南出土の甕は、第1遺構面の時期に近いものであると考える。

6. ま と め

本稿では、これまでの穴太廃寺関係の参考資料で記述されていない新たな事実を検証するとともに、種々の疑問点について厳求してみた。概ね、再建寺院に関して大津宮遷都期、創建寺院は、7世紀第2四半世紀前半までには、すでに完成していたと考えられる。創建寺院の母体になったものが、切妻大壁造住居等に住む渡来系氏族であったことも間違いないと考える。しかし、いずれの問題点も建立年代を決定するには疑問が残り考察者の主観が入りがちである。今後、須恵器等を始めとする土器の年代観の確立を急務とすることはもちろん、大津北方の発掘調査で検出された遺構を厳密に検証していく必要があり、同時期における面的な中での各々の遺構の位置、性格、相互関係を検証する作業が必要である。

注

- (1) 佐藤宗諄他 「穴太下大門遺跡」(『大津市文化財調査報告書(3)』大津市教育委員会 1963年)
- (2) 森 郁夫 「穴太廃寺—古代寺院の中でのその位置づけ—」(『穴太廃寺の保存を願って』皇子山を守る会他 1985年)
- (3) 『山田寺展』(奈良国立文化財研究所飛鳥資料創 図録第八冊 1981年)
- (4) 『月刊文化財発掘出土情報』85・5 (ジャパン通信社 1985年)
- (5) (3)と同じ
- (6) 林 博通・葛野泰樹「滋賀県大津市穴太遺跡の瓦窯跡」(『考古学雑誌』第64巻第1号 1978年)
- (7) 岡田精司 「古代の寺院の性格について」(出典は(2)と同じ)
- (8) 「史跡上野廃寺講堂跡の調査」(検討会資料 社団法人和歌山県文化財研究会 1985年)

- (9) 森 郁夫氏、安井良三氏の教示による。
- (10) 『山城の古瓦!』(京都府立山城郷土資料館 1983年)
- (11) 肥後和男「大津京跡」(『滋賀県史跡調査報告三』 名著出版 1964年)
- (12) 林 博通『檀木原遺跡発掘調査報告III』(滋賀県教育委員会 助滋賀県文化財保護協会 1981年)
- (13) 安井良三「檀木原瓦窯跡調査に関連する諸問題」(『檀木原遺跡発掘調査報告』 滋賀県教育委員会 助滋賀県文化財保護協会 1975年)
- (14) 藤沢一夫氏の説による。
- (15) 水野正好「大津・大津京・穴太廃寺」(出典は(2)と同じ)
- (16) (2)と同じ。
- (17) 吉谷芳幸「渡来系集団の集落跡」(『滋賀文化財だより』No73助滋賀県文化財保護協会 1983年)
- (18) 大津市教育委員会 吉水真彦氏の教示による。
- (19) (1)と同じ。
- (20) 田辺昭三他『湖西線関係遺跡調査報告書』(湖西線関係遺跡発掘調査団 1963年)
- (21) 林 博通他「渡来人の村復原」「渡来人の村」(『図説滋賀県の歴史』河出書房 1987年)
- (22) 吉水真彦他「滋賀里・穴太地区遺跡群発掘調査報告書II」(『大津市埋蔵文化財調査報告書(5)』大津市教育委員会 1982年)
- (23) 林 博通「穴太廃寺」(『仏教芸術』174号—特集最近発掘された寺院跡とその遺物—毎日新聞社 1987年)
- (24) (6)と同じ。

編集後記

年度当初に、これまであまり活発でなかった文化財愛護のための普及啓発事業について、今年度からはより充実したものを計画せよと命ぜられた折り、各種の展示会などの一般向けの事業のほかに、専門知識の普及啓発を兼ねて財団職員の普段の研修の成果を公表できるよう『紀要』の発刊を試みることにした。10名程度の論考を掲載することとしたが、実のところ、あまり原稿が集まらないのではないかと不安であった。しかし、これは取り越し苦労で、希望者を募ったところ即座に10名の申し出があり、職員の隠れた研究意欲を垣間見た次第であった。本年は創刊の年ではありますが、初心を忘れることなく続けたいものと思う。

(普及啓発事業担当)

昭和63年3月 初版
平成4年3月 2刷
平成6年3月 3刷

紀 要 第 1 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781
印 刷 宮川印刷株式会社
大津市富士見台3番18号
Tel(0775)33-1241